オニノヤガラ

Gastrodia elata

ラン科

名前の由来
真直な茎を鬼が使う矢に見立てて名付けられた。別名ヌスビトノアシ。足形に見える根茎を盗賊の足に見立てたもの。
漢字名：鬼の矢柄

オニノヤガラ

形態的特徴

腐った木に寄生する腐生ランで、葉緑素、葉はなく全体が黄褐色～黄赤色をしている。茎は円柱形で直立し、高さは60～100cmほどで、所々に鱗片がある。地下にジャガイモ状の根茎がある。茎の上部に黄褐色で壺形の花が多数、密につく。

類似種：特になし。

オニノヤガラ。花

オニノヤガラ。花の付き方

オニノヤガラの茎

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期			―	―								
結実期				―	―	―						

生育環境・分布

山地の疎林内や木陰、ササ群落内などに生育する。

分布：国外分布は、中国・台湾。

国内分布は、北海道から九州。

北海道内分布は、全道。

十勝地方では、林内や木陰でまれに見られる。

オニノヤガラ

生活史

開花時期：6～７月

開花までの年数：不明

寿命：多年草。

他生物との関わり

オニノヤガラは葉緑体を持たず、腐った植物の遺体から有機物を吸収する腐生植物の一種である。これらの植物は菌の助けがあって初めて有機物を吸収できるということが知られており、オニノヤガラも林業で病原菌として扱われるナラタケの仲間に頼って生きている。

ナラタケはオニノヤガラの根茎に感染し、細胞内に進入し、糸だま状の菌糸の塊を形成する。オニノヤガラはこの菌を細胞内で消化し、自らの栄養源として成長するが、ナラタケ自身がオニノヤガラに感染し、「食べられる」ことで、どのような利益を得ているのかは十分にわかっていない。

興味深い話

■オニノヤガラの根茎、花茎には鎮痛、鎮痙作用があり、薬用として用いられる。

■オニノヤガラは葉緑体を持たず、林業で病原菌として扱われるナラタケの仲間に頼って生きている。（→他生物との関わりの項参照）

■十勝地方のアイヌ語名は不明。他の地方ではウニンテプ（互いを・消え・させる・もの）と呼ばれる。枯れた茎も姿を消し、また種子が転々として一定の所に生えないと言われる。

■根茎は煮たり焼いたりして食べられ、ゆでると甘くなって粉をふくという。松浦武四郎の「石狩日誌」には「アイヌのサツマイモ」としてごちそうになったという記述があるという。

配慮事項

腐った木の根や腐った植物などが必要である。

オニノヤガラ。根茎は大きく、盗賊の足にたとえられる

参考文献

「改訂版　牧野新日本植物圖鑑」牧野富太郎　北隆館　1989

「北海道植物図譜」滝田謙譲　自費出版　2001

「日本の野生植物　草本Ⅰ」佐竹義輔・大井次三郎　他　平凡社　1982

「北海道薬草図鑑　野生編」山岸喬　北海道新聞社　1992

「森林で遊ぼうシリーズ3」おもしろい草花の話　北海道立林業試験場　北海道林業改良普及協会　1998

「アイヌ植物誌」福岡イト子　草風館　1995